

地球電磁気・地球惑星圏学会

SOCIETY OF GEOMAGNETISM AND EARTH,
PLANETARY AND SPACE SCIENCES (SGEPSS)

第127号 会 報 1989年11月20日

目 次

頁	頁
I 第86回総会ならびに講演会	5
II 会長挨拶	5
III JGG論文奨励賞審査報告	5
IV 運営委員会庶務報告	6
V 地球惑星科学関連学会合同大会	6
VI 1990年WPGMについて	7
VII JGG出版財政報告	8
VIII JGG編集委員会報告	5
IX 新入会員	5
X 次次期学会開催地	5
XI Chapman会議案内	6
XII 教官公募 共同研究公募 研究助成金公募	6
XIII 訃報 - 今道周一 名誉会員	7
XIV 学術会議便り	8

I 第86回総会ならびに講演会

第86回総会と講演会は10月11・12・13日、神戸大学理学部のお世話で同教育学部を会場として開催された。12日午後、須田英博氏(神戸大学理学部)と大屋寛会員による特別講演、出席者の写真撮影の後、総会は西田議長選出、安川大会委員長挨拶、に引き続き、網川会員へ第一号JGG論文奨励賞が行武会長より授与された。小口編集委員長の審査報告(本会報III)の後、下記式次第に従い、行武会長挨拶(本会報II)、庶務(本会報IV)、地球惑星科学関連学会合同大会(本会報V)、WPGM(本会報VI)、JGG出版・財政報告(本会報VII)、編集委員会報告(本会報VIII)がなされた。委任状・出席者総数189確認の後、議事に入り、再度学会誌出版財政の現状の説明と質疑応答が行われ次期総会への継続議題となった。次期学会開催地確認、次次期学会開催地提案の後、謝辞、閉会となり、ほぼ定刻に懇親会場へと移行した。

(第86回総会式次第)

1) 閉会の宣言

- | | |
|--------------------------|---------------------|
| (2) 総会議長指名 | (議長: 西田運営委員) |
| (3) 大会委員長挨拶 | (安川大会委員長) |
| (4) JGG論文奨励賞授与
同 審査報告 | (行武会長)
(小口編集委員長) |
| (5) 会長挨拶 | (行武会長) |
| (6) 運営委員会報告 | |
| * 庶務報告 | (林運営委員) |
| * WPGM | (本蔵運営委員) |
| * 春の学会 | |
| 地球惑星科学関連学会合同大会 | (本蔵運営委員) |
| * JGG報告 | (福西運営委員) |

- | | |
|---------------|-----------|
| (7) 編集委員会報告 | (小口編集委員長) |
| (8) 議事 | |
| * JGG出版財政について | |
| * 次期、次次期開催地 | |
| (9) 謝辞 | (広岡評議員) |
| (10) 閉会の辞 | |

II 会長挨拶 行武 毅

今回は、神戸大学理学部のお世話で8年ぶりに神戸で学会を開くことができました。外国人観光客も多く、街並みもどことなく文化の香りが漂ってくるような落ち着いた雰囲気の中で学会が開けたことは、大変幸いでした。会場の運営には非常に細かい心配りをしていただきました。講演の残り時間をブラウン管ディスプレイの上にカラーで図示するなど、いかにもハイテクの時代の講演会という感じでした。また、ゼロックスコピーの無料サービスや、スライド、OHPのテストができるよう休憩室に余分のプロジェクターを準備していただいたり、いわば学会の裏方の機能を充実してくださったのはありがたいことでした。さらに百万ドルの夜景を楽しみながらの懇親会も印象に残りました。神戸大学の皆様に厚くお礼を申し上げます。

さて、春の学会から今回の学会までの一番大きな出来事といえば、7-8月に英国のExeterでIAGAの学術総会が開かれたことでしょう。われわれの学会からも多数の会員が参加されましたが、なかでも目だったのは若い会員の姿でした。これまで大学院生などの若いひとたちの参加はほとんど米国に限られていた感じでしたが、わが国も米国に近づきつつあるのは、喜ばしいかぎりです。若い研究者の活躍や交流は大変評価され、わが国の研究の現状が再認識されるきっかけにもなったようです。

こんどのIAGA総会で議論を呼んだのは、IGRFをもとに地球磁場の情報を民間会社に提供して資金を獲得しようという英国地質調査所からの提案でした。そもそもこのような提案が提出されることになったのは、開発途上国の地磁気観測所の維持がきわめて困難になっているという事情によります。閉鎖されたり、閉鎖寸前の観測所が数多くあり、地磁気観測に深刻な問題を引き起こしています。提案自体は白熱した議論を巻き起こし、結論を得るにはいたりませんでした。開発途上国の観測所をどのようにして維持してゆくか、はわたくしたちが真剣に取り組まねばならない問題として残っています。

つぎのIAGA学術総会(1993)はアルゼンチンで開かれることが決まりました。また今回の総会で、福島直会員が、長い間IAGAにたいして尽くされた功績により、IAGA名誉会員に推挙されました。わたくしたちも肩身の広い思いがします。

来年わが国では二つの画期的学会が開かれようとしています。ひとつは4月に東京工業大学で開かれる地球物理学連学会の合同大会で、もうひとつは8月に金沢で開催される Western Pacific Geophysics Meeting (国際地球物理金沢会議)であります。この会報の別の欄で報告されているように、いずれも着々と準備が進んでいます。新しい時代を反映するこれらの学会をぜひ成功させたいものです。

この秋の学会からおめでたい行事がひとつつえました。JGG論文奨励賞です。昨年からの編集委員会で慎重に選考を進められた結果、網川秀夫氏の "Geomagnetic secular variation during the Brunhes epoch inferred from the paleomagnetism and the last 200 years geomagnetic field." に対して授賞されました。こんごぞくぞくと優れた論文がJGGに発表されることを期待したいものです。

この学会の会員でよその学会の賞を受賞された方もあります。加藤進会員が、「中間大気研究の発展に尽くした功績」により、日本気象学会の藤原賞をお受けになりました。また上田誠也会員は「地球物理学の手法の応用を通して地質学へ顕著な貢献をなした功績」により米国地質学会から George P. Woolard 賞を受賞されます。心からお祝い申し上げます。

最後に悲しいお知らせをせねばなりません。今週周一名譽会員が8月5日急逝されました。ご承知のとうり今道先生は本学会の創設に当たって大変ご尽力くださいました。先生の志をついで学会の発展に努力して行きたいと考えます。先生のご冥福をお祈りします。

III 1989 JGG論文奨励賞審査報告

論文名 Geomagnetic Secular Variation during the Brunhes Epoch Inferred from the Paleomagnetism and the Last 200 Years Geomagnetic Field

著者 網川 秀夫

1. 背景

古地磁気永年変化 (paleo-secular variation: PSV) の研究はカナダのアービング、イギリスのクリア、アメリカのコックスなどによって始められたもので、古地磁気のデータから、過去の磁場変動の統計的性質、non-dipole場の重量に基づくdipole場のゆらぎの統計的な振舞い、を明らかにしようとするものである。時間的には 10^5 - 10^6 年の平均的変動を、双極子型の磁場からの、自

乗平均的なずれの形で求め、この値が地理的緯度によってどのように変わるかを調べることが多い。

2. 近年の状況

PSVの研究は1960年代から始まっているが、現在でも研究は活発に行われている。最近、注目されているモデルは、dynamo作用に基づく磁場のpatternにdipole-familyとquadrupole-familyがあるとする、オーストラリアのマクファデンらのモデル、core表面まで戻した時、 g_1^0 以外の項を乱数で与える、アメリカのコンスタブルとパーカーのモデルなどがある。

このような研究が盛んな理由は、古地磁気の研究では、時間を連続的に追って磁場変動を調べることが困難なこと、にもかかわらず、統計量として求めたPSVの緯度に対する依存性は、地磁気研究における最も基本的な問題の一つである、地球磁場の生成機構 (ダイナモ理論) に大きな影響 (制約など) を与えると考えられるからである。PSVについては、これまで日本の研究者からの寄与は残念ながら余り多くはなかった。

4. その特徴

網川論文は、まずプリユヌ期 (現在から70万年前まで) の古地磁気のデータを解析し、各地の資料からdipoleを仮定して求められる地磁気極の分布が、これまで一般に考えられているような、平均的古地磁気極に対して対称な分布 (フィッシャー分布) でなく、これから大きく外れていることを見いだした。

この原因を探るために、最近200年間のガウス係数 (g_0^0 , g_1^1 , h_1^1 など) の変化について調べ、それらが、双極子成分 (g_1^0) と相関の強いものと、ほぼ無相関のものに分かれることを発見した。

そこで、この相関を保ったまま過去の磁場変動がおこったものと仮定し、双極子の変動の統計的性質については古地球磁場強度変化の研究から知られたものを用いて各地のPSVの予測値 (推定値) を求めたところ、実測とよく似た、赤道に対する対称性の悪い、推定極の分布を与えることが判った。

更に、この論文では、いくつかのガウス係数に見られる相関の強い変動は、コア内のダイナモ作用に原因を求めべきであると論じている。大きな興味をかき立てられるのは、この関係を、前述のマクファデンのモデルと比較してみると、両者が全く一致しない点である。網川のdipole-related familyはマクファデンの云うdipole familyとは全く関係のないことが判る。

4. 評価

編集委員会はこの論文の「元気のよさ」、「いきのよさ」、あるいは「面白さ」を高く評価した。わずか200年程度の最近のSVと0万年程度のPSVをそのまま結び付けるなどは、かなり強引な手法とも考えられるし、また、この論文の提唱したPSVの機構が真実であるかどうかについては、今後の研究に待たなければならない。

しかし、これまでほぼ対称な分布を仮定していた解析法の仮定を疑ってかかり、非対称性を指摘した点は高く評価されるべきである。更に、これまでの日本の研究者が新しいモデルを作ることにより余り寄与していない点も併せ考えると、間違いの可能性を恐れず、大胆な仮説を打ち出して行く姿勢も若い研究者として重要な要素であると考えられる。

以上の考えから、編集委員会は第1回JGG賞の候補として網川論文を選んだ

IV 運営委員会庶務報告

前回総会(平成元年春、東京)以降、第154回運営委員会(会報第126号に既報)を7月7日に第155回運営委員会を学会前日10月10日にそれぞれ開催した。来春の地球惑星科学関連学会合同大会実行体制が固まり、会場数・時間に比例した経費分担、共通セッション、特別シンポジウムについて担当運営委員よりの報告を受け承認した。これに伴い、当学会の学会申込用紙の形式を改訂する必要が生じ、領域区分を現状に合った内容に手直すことも含め、プログラム担当委員が改訂作業を進めることになった。WPGMについて、日本語呼称「国際地球物理金沢会議」およびほぼ固まった実行案についての報告を受け、AGUと日本側学会の経費負担分担案等を承認した。既に承認されている、WPGMに対する100万円を限度とする援助金支出(賛助会員基金より)について、負担金は上記額よりかなり下回る見込みであることが報告された。この件に関連して、以下の提案があり審議の結果承認した。WPGMの援助金は海外よりの参加者数にあるとの認識に立って「WPGMへの援助金については、100万円を確定額とし、他学会にも働きかけ、海外よりの若手参加者のための旅費援助基金を実現・促進する。」来年度(第88回総会及び講演会)について、上記WPGMより問合せ、例年より遅い11月頃に実施することになった。JGG出版財政問題について、編集委員会よりの状況説明を深刻に受け止め、対応策が議論され、この件を総会議事とすることが決定された。「Chapman Conference on Magnetospheric Substorm」の後援を決定した。会員名簿の改訂については、質・経費・労力の上からより現実的な方策に向けて検討が進みつつある。

V 地球惑星科学関連学会合同大会

来春の第87回地球電磁気・地球惑星圏学会(SGEPSS)講演会及び総会は地球惑星圏科学関連学会との合同大会として開催すべく、すでに3回連絡会を開くなど、順調に準備が進んでいる。時期的に差し迫っているため、この稿は経過現状報告と学会講演申し込みの最終呼びかけを兼ねるものとする。

(1) 参加学会

地震学会、地球電磁気・地球惑星圏学会、火山学会、測地学会、地球化学会。

気象学会、海洋学会にも呼びかけたが、準備不足等の理由で参加できない。ただし、両学会及び陸水関連学会には、大会の様子等を連絡する。

(2) 大会の日程・場所

1990年4月6日(金)、7日(土)、8日(日)

東京工業大学大岡山キャンパス内の10会場

(3) 大会の構成

各学会毎の固有のセッション及び総会、複数学会が参加する共通セッション、総合テーマのシンポジウム、特別講演、合同懇親会から成る。共通セッション、シンポジウム、特別講演は以下のように決定した。なお、これらはコンピーナーによって企画運営される。

(i) 総会 大会2日目に、各学会毎に多少時間をずらして行う。

(ii) 共通セッション 8テーマ(詳細は頁末※参照)

(iii) シンポジウム 地球中心核(SEDI 関連)

このシンポジウムは会場の関係で、前日(4月5日)の予定

(iv) 特別講演 大会2日目午後の予定。

テーマ 「地球温暖化について」

気象関係は松野太郎教授(東大)、

火山関係は Prof. H.Sigurdsson (Univ. Rhode Island)

(v) 合同懇親会 特別講演・総会の後、6時頃から開く。

参加費は ¥4,000 (但し学生は ¥3,000) の予定。

(4) 予稿集関係

・共通セッション・シンポジウム用として一冊、各学会毎に一冊それぞれ作る。

・共通セッションの原稿は各セッションのコンピーナーに直接送付する(※参照)。

・当学会(SGEPSS)の固有セッションについては、従来通りとする(次頁※参照)。

(5) 原稿のフォーマット

・共通セッション・シンポジウムについては、以下の通り。

B4版縦長とする。

上下マージン20mmとる。左右マージン15mmとる。

まず題目、著者・所属(和文)を縦幅30mmの枠内に記入(ただし左端30mmあける)。次に題目、著者・所属(英文)を

同じく縦幅30mm枠内に記入(ただし左端20mmあける)。以下本文が続く。和文でも英文でもよいが、和文の場合は縦2列とし、中央部分に10mmの空白部を作ること。

・SGEPSS固有のセッションについては申し込み用紙、予稿原稿用紙とも従来通りである(次頁※参照)。

(6) 予稿原稿締切 1990年2月1日(木)(厳守)。

(7) 分担金: 延べ会場使用時間数に比例した分担金を各学会から徴収する。総会は分担金の対象に、各種委員会は対象外とする。

(8) その他

各種委員会等については、締切までに東工大実行委員会に連絡すること。

プログラム(各種委員会を含む)は共通のものを作成する。

ポスターセッションを設ける。

※各共通セッション・シンポジウム一覧

セッションまたはシンポジウム名・(関連学会)・主世話人(予稿原稿送付先) / 副世話人・「世話人から投稿者への呼びかけ」

(ア) 惑星・衛星の起源と進化 (地震、SGEPSS、火山)

松井孝典(〒113 東京都文京区弥生2-11-16 東京大学理学部地球物理教室) / 中川義次(東大理)

「アポロに続く惑星探査の成果の上に、太陽系の起源と進化が実証的に議論され始めている。各学会の合同大会でこれまでの成果を総合的に討論することは大変意義深い」

(イ) 地球内部構造 (地震、SGEPSS、火山、地球化学)

川崎一朗(〒富山市五福3190 富山大学理学部地球科学教室) / 浜野洋三(東大理)

「マントルやコアにおける対流の軌跡である地震波速度や電気伝導度等の横・垂直方向の変化を明かにし、また、物質科学との協力により、そのメカニズムに迫りたい」

(ウ) テクトニクス (地震、SGEPSS、火山、測地、地球化学)

瀬野徹三(〒113 東京都文京区弥生 1-1-1 東京大学地震研究所) / 乙藤洋一郎(〒神戸大) 多田堯(地理院)

「海洋地域野テクトニクス(ODP・DELPの成果、縁海・西太平洋域の発達史等)、島弧・大陸域のテクトウニクス、地震・ネオ

テクトニクス等、テクトニクス全域を含む」

(エ) 地殻変動 (地震、測地)

岡田義光 (〒305つくば市天王台3-1国立防災センター第2研究部) / 竹本修三 (京大理)

「地球規模から地震火山活動に関連したローカルな地殻変動まで、あらゆる時空間スケールにおける地殻変動の検出技術、観測成果ならびにその解釈に関するテーマを含む」

(オ) 重力 (地震、測地)

河野芳輝 (〒920金沢市丸の内1-1金沢大学理学部地学教室)

/ 里村幹夫 (静岡大教養)

「重力の測定方法、重力異常、重力変化、ジオイド、地球潮汐など、重力お予備その利用の関するあらゆる講演を募集します」

(カ) 電磁場を見た地殻・マントル・核 (SGEPSS、測地)

笹井洋一 (〒113東京都文京区弥生1-1-1 東京大学地震研究所)

/ 田中 稔 (地理院)

「地殻の構造を磁気異常から、地殻とマントルを誘導電磁場から、核の流体運動ダイナモ作用を主磁場の形態と永年変化 (現在のみなら地質時代まで含む) から探る」

(キ) 地震予知・火山予知 (地震、SGEPSS、火山、地球化学)

岡田弘 (〒052-01有珠郡壮瞥町警温泉59北海道大学理学部有珠火山観測所) / 吉田明夫 (気象研) 野津憲治 (東大理)

「予知研究は着実な成果を積み上げてきた。しかし社会の要求に答えるためには高解決すべき基礎研究の推進と観測の充実が望まれる。予知研究の現状と将来を議論したい」

(ク) 火山活動 (地震、SGEPSS、火山、地球化学)

浜口博之 (〒980仙台市青葉区荒巻字青葉 東北大学理学部地震予知・噴火予知センター) / 渡辺秀文 (東大震研)

「伊豆半島周辺をはじめとする最近の噴火活動、及び、火山活動に関する問題全般についての観測、長さ、実験、理論など多様なアプローチによる講演を歓迎する」

シンポジウム: 「地球中心核」

(地震、SGEPSS、火山、測地、地球化学)

深尾良夫 (〒464-01名古屋市中種区不老 名古屋大学理学部地球科学教室) / 本蔵義守 (東工大理) 八木健彦 (東大物性)

「マントルの下部を含む構造、超高压実験、核流体運動とダイナモ、核形成過程、D”層の形成と不安定性等、核とその境界の諸問題を総合的に追及する研究を歓迎する」

★地球電磁気・地球惑星圏学会 (SGEPSS) 講演会の固有セッションについて

講演申込・予稿原稿送り先及び申し込み要領

☆地球内部および月・固体惑星関係

〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部地質学鉱物学教室 鳥居雅之 宛

☆太陽・惑星間空間および地球・惑星電磁圏関係

〒606 京都市左京区北白川追分町

京都大学理学部地球物理学教室 寺沢敏夫 宛

☆地球・惑星大気圏関係

〒442 豊川市穂の町3-13

名古屋大学空電研究所 近藤 豊 宛

1. 締切日は2月1日(木) 必着です。締切日以降に到着した申込は自動的に却下いたします。電話やFAXによる申込や遅延依

頼は受け付けません。

講演申込要領

2. 講演申込用紙への記入(氏名・所属・講演題目など)は、プログラム編集・印刷の都合上必ず日本語でお願いいたします。なお外国人の氏名はアルファベット表記でもさしつかえありませんが、所属はできるだけ日本語で表示して下さい。

3. 非会員のみによる講演申込は受け付けません。筆頭著者(ファーストオーサー)になれるのは1人1講演に限ります。ほぼ同じ内容の講演を、筆頭著者だけを取り替えて複数の講演として申し込むのはおやめ下さい。

4. 予稿原稿は、同封用紙にワープロで印刷されるか、あるいは黒色のインク、ボールペンなどで丁寧に手書きして下さい。ワープロで同封用紙に直接印刷するのが困難なときは、無理に張り付けたりせずに、規定の枠にあうようにB4用紙に鮮明にコピーなどされても結構です。

5. 予稿本文が日本語の場合は、枠に規定されているように2段組にされると、印刷後読みやすくなります。

6. プログラム編集を迅速に行えるように、予稿原稿のコピーを必ず1部同封してお送り下さい。

7. 口頭発表の時間は15分(講演12分、質疑3分)以内です。

8. 限られた会期を有効に利用するために、ポスターセッションに特に分野を定めずに約50件の発表を予定しておりますので、奮ってお申込下さい。ポスター発表・口頭発表の区分はご希望にできるだけ従いますが、プログラム構成の都合上ご希望の区分以外の発表をお願いすることがありますので、ご協力下さるようお願いいたします。

9. ポスターの掲示板は、縦180cm、横90cmのベニヤ板1枚です。画紙・セロテープなどは会場に用意いたします。

10. 緊急の話題のために、約5件のポスタースペースを確保いたします。発表希望者は4月5日までに関係のプログラム委員に申し込んで下さい。

11. 各セッションの座長を2名とし、講演会の進行を能率的に進めていきたいと思っておりますので、ご協力をお願いいたします。

VI 1990年WPGP (8月21~25日) について

AGU側からSpilhaus氏が来日し、9月12日に金沢で実行委員会(LOC)、14日には東京で組織委員会(OC)が開かれた。これらの会議で1990WPGMの最終実行計画が以下のように決定された。

(1) 登録料

1990年7月21日まで、・・・¥14,000

それ以降、・・・¥17,000

ただし、学生は半額

(2) アブストラクト

締切、・・・1990年2月14日

送付先、・・・直接AGUへ

フォーマット、・・・EOS (June 27, August 22, 1989) 参照

(注 Abstract charge が必要)

(3) 論文数制限

基本的には制限しない方向で検討しているが、論文数が非常に多いと会場の運営上困るので、プログラム委員会(PC)の判断に委ねることとなる。複数の論文を提出する著者は、制限の場合を想定して、論文に優先順位をつけることが望ましい。

(4) アブストラクト集

通常の AGU-Meeting 同様、EOS にまとめられるが、WPGM 開催日までに手に入れたい場合、\$15 または ¥2,200 支払えば航空便で各自に郵送してもらえます。また、当日 \$6 または ¥1,000 で会場でも購入できる。

(5) 特別セッション等 現在 PC で検討している。

(6) その他

国内では WPGM を国際地球物理金沢会議と呼ぶことになった。詳しくは、東工大の本蔵運営委員会にお問い合わせ下さい。

VII JGG 出版財政報告

学会誌発行に係わる財政問題が顕在化して久しい現在、具体的な打開策を提示するべき時期に到ったものと深刻に受け止めています。問題の所在は編集委員長報告に詳しく述べられていますので学会会員各位におかれましても十分ご理解のうえ会長・運営委員までご意見をお寄せ下さい。

VIII JGG 編集委員会報告 編集委員長 小口 高

既に会員の皆様もお気付きのことと思いますが、JGG が月刊誌として定着するに伴い、毎月の発行日を月初めにするのが可能となってきました。今後、更に一層 JGG を発展させるために、会員の皆様の積極的な投稿をお願いします。

しかし、次第に順調になって来ているとは云うものの、我々はまだいくつかの問題を抱えています。その一つは論文投稿数の変動の大きさです。これは、後に述べる、JGG 発行にかかわる費用の問題にも直結しています。

JGG はその刊行費の一部を文部省の助成金によってまかっていますが、助成額は年間の刊行頁によって決ります。実際の刊行頁数が下限を割込むのは助成金の趣旨から見ても避けなければなりません。年毎に揺らぎが大きいと、低い方に合わせて申請せざるを得ない訳です。従って、揺らぎが多い方に偏ったとしては赤字を出すことになります。

この問題の解決は、逆説的になりますが、投稿論文が増加すれば目途を立てることが可能になります。つまり、編集委員会での手持ち論文の数が増えて刊行頁数を或程度均等化することが出来るようになれば揺らぎの巾が狭くなり、助成などに弾力的に対応することが可能になるからです。

更に大きな問題は、現行の会費の枠の中で考える限り、会員の伴って発行部数が増加すると赤字が増えたと云う、構造的な問題です。この点を本質的に解決しようとすれば、会費の値上げが必要となりますので、問題の解決を現在運営委員会で検討して頂いている所です。これは、新しく始まった問題ではなく、従来とも抱えていたものが会員数の増加によって顕在化して来たものです。会員の皆様のご配慮をお願い申し上げます。

次の報告は JGG 論文奨励賞に関するものです。編集委員会は隔月に開かれていますが、そのかなりの時間をこの賞の発足のために、その性格、候補論文選考の手続き、及び今年度の審査に費やしました。賞の性格としては、手堅くまとまった、しかしおもしろくない論文より、荒削りではあっても、大胆でおもしろい革新的な性格をより高く評価すると言う点で編集委員会全員、意見の一致を見ました。

候補論文選考手続きは以下の通りです。まず、全編集委員がそ

れぞれ一年間に編集を担当した論文を中心として、何編かを推薦します。これらの全ての推薦論文のリストを作成して編集委員に配布し、全編集委員が推薦された論文のすべてに目を通す訳です。この予備的作業の後、審査を開始し、検討を始めますがもちろん必要に応じて論文の読み直しが行われます。こうして最終的に選考された論文は候補論文として評議員会に諮られ、審議の後、受賞論文に決定します。今後、具体的な問題に対応して、これらの手続きの細部には若干の変更があるかも知れませんが、基本的には今回採った方法に大きな問題はなく、継続して実施して行くつもりです。

この賞は若手研究者の奨励のためのもので、年齢が40才以下に限られています。また、繰り返しになりますが、論文の面白さ、大胆さ、革命性などがより評価されます。研究には本来、これらの要素がたいへん大きいと考えます。"研究を行った結果、既に発表されている誰その結果とおなじ結果が得られました"という研究はやらなくてもよかったことになると思うのです。どうぞ会員の皆様には年齢にかかわらず、革命的論文を多数投稿して下さいますようお願い申し上げます。

IX 新入会員

154回運営委員会で承認された14名(前会報既報)及び、155回運営委員会で承認された6名の新入会員が学会総会に於て紹介された。155回運営委員会において以下の方々の入会が認められました。

正会員	堀内千尋	京都工芸繊維大学工芸学部
	蔡 東生	神戸大学総合情報処理センター
	交久瀬五雄	大阪大学理学部物理学科
	村上英記	高知大学理学部地質学教室
学生会員	小田啓邦	京都大学理学部地質好物教室
	ババツヴェント	東京大学海洋研究所

(正-4、学生-2、計6名)

この期間(1989年7月~10月)に退会された方は正会員1名、学生会員2名、種別変更1名、外国会員から国内会員への変更1名です。

正会員	学生会員	名誉会員	賛助会員	海外会員
521	71	6	19(34口)	52

X 次期・次次期学会開催地

次期学会講演会及び総会の開催は、当会報のVに詳しく報告されている通り、東京工業大学のお世話により、平成2年4月6~8日に地球惑星科学関連学会合同大会として開催される。尚、合同大会となるため、予稿締切が例年よりも早くなったこと、従来通りのセッションと共通セッションがあり予稿の記述方、送付先が異なりますのでVを熟読の上間違いのないようお願い致します。

次々期、秋の学会及び総会は東京大学理学部地球物理教室のお世話により東京地区に於て開催されることになった。時期は、WPGM(当会報VI)から間を設け11月になる予定。

XI 磁気圏嵐に関するチャップマン会議

Chapman Conference on Magnetospheric Substorms

開催主旨 去る2月待望の極軌道磁気圏観測衛星「あけぼの」が成功裡に打ち上げられ、順調にデータを取得しつつあることは、磁気圏・電離圏研究者にとって誠に喜ばしいことです。

「あけぼの」衛星の観測は、わが国の磁気圏・電離圏の研究に新しいインパクトを与えるとともに、国際的にも成果が期待されております。このような状況を考え、磁気圏に関する国際的な会議を日本で開催することはタイミングとしても有意義であると考え、この会議の開催を計画しました。幸い多くの研究者のサポートを得て、Chapman Conference on Magnetospheric Substormsとして開催することになりました。日本でこのような研究集会を持つことが、これからの研究を担う若い研究者への刺激となることを期待しております。Chapman Conferenceとしては、一昨年末東北大学の大家教授のご努力でわが国始めて仙台において開催されましたので、この会議はわが国としては2度目のものになります。

口頭発表は、招待講演者によるものを主としたプログラム編成となります。また、発表論文はまとめて本として出版する予定です。開催期間：1990年9月3日 - 9月7日（5日間）

開催地：神奈川県足柄下郡箱根町仙石原 箱根観光ホテル

開催責任者：

- 園分 征 (東京大学 理学部)
飯島 健 (東京大学 理学部)
Thomas A. Potemra (ジョージア工科大学応用物理研究所)
Joseph R. Kan (アラスカ大学)

後援：地球電磁気・地球惑星圏学会、American Geophysical Union
プログラム委員：

- 大家寛 (東北大学理学部) 平澤威男 (国立極地研究所)
上出洋介 (京都産業大学) 杉浦正久 (東海大学開発技術研究所)
鶴田浩一郎 (宇宙科学研究所) R.C.Elphic (ロッキード国立研究所)
L.A.Frank (アバタ大学) G.L.Siscoe (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)
D.N.Baker (NASA/GSFC) D.J.McEwen (サスカチュワン大学)
E.Friis-Christensen (デンマーク気象研究所)
R.N.Lundin (スウェーデン宇宙空間物理研究所)

プログラム概要：

1. 歴史的レビュー
2. 磁気圏嵐と磁気圏境界面/境界層 (半日)
3. 磁気圏嵐と磁気圏尾部 (半日)
4. 磁気圏嵐と内部磁気圏 (1/4日)
5. 磁気圏電流系とオーロラダイナミクス (1日)
6. 磁気圏嵐モデルと総合討論 (3/4日)

【講演、参加料、期限、連絡先】

Abstract送付切：1990年3月31日

宛先及び連絡先：〒113 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学理学部地球物理研究施設 園分 征/飯島 健

Tel 03-815-8020 FAX 03-818-0745

参加登録申込(Registration Fee) 25,000円 (学生は 12,000円)

Abstractの形式、参加申込については、いずれ関係各位にお知らせいたします。

XII 教官公募

名古屋大学空電研究所助手

- ・公募人員： 助手 2乃至3名
- ・研究内容： 太陽地球環境科学

空電研究所は理学部附属宇宙線望遠鏡研究施設と共に、太陽地球環境の総合的研究を行う全国共同利用型研究所、太陽地球環境研究所(仮称)への改組の準備を進めています。改組後の研究系は、主として中層、超高層の大気科学を中心テーマとする「大気圏環境大部門」、電離圏、磁気圏の研究を中心とする「電磁気圏環境大部門」、太陽圏構造、太陽風等を中心とする「太陽圏環境大部門」、及び、資料総合解析、モデリングを中心とする「総合解析大部門」の4大部門と、大気圏化学組成変化の変動予測を中心とする「大気圏環境予測客員部門」とで構成される予定です。今回の公募では、主として、「大気圏環境大部門」において大気圏化学組成変動、及び光化学を中心とする研究に従事する研究者、及び、「電磁気圏環境大部門」において多点観測を中心とする研究に従事する研究者を希望します。

- ・着任時期： 平成2年4月1日
- ・書類提出： 履歴書、研究歴、業績リスト及び主要論文別刷
研究の抱負、推薦書、自薦の場合は本人について意見を述べられる人のリスト2名程度
- ・公募締切： 平成元年12月28日

候補者の選考：名古屋大学空電研究所改組検討委員会の意見を聞き、空電研究所教授会で決定します。なお、適任者のない場合は決定を保留します。

・宛先、問い合わせ先：〒442 愛知県豊川市穂原3-1-3
名古屋大学空電研究所 所長 小口 高

電話 05338-6-3154

共同利用・共同研究課題公募

平成2年東京大学海洋研究所研究船・白鳳丸・淡青丸、木植臨海研究センター及び研究会・外来研究員の共同利用公募が参っています。締切は11月30日 詳細については学会庶務または下記へお問い合わせ下さい

東京大学海洋研究所 TEL (03)376-1251

〒164 東京都中野区南台1-15-1

大槌海洋研究センター TEL (0193)42-5611

〒028-11 岩手県上伊郡大槌町赤浜2-106-1

研究助成金案内

国際コミュニケーション基金(平成元年度後期分)

実施期間 平成2年4月~平成3年9月

1. 国際会議の開催(30~200万円)
2. 国際会議への参加(日本から、及び海外からの参加)

締切:平成元年11月30日

申込用紙は学会庶務にあります。または下記へ

財団法人 国際コミュニケーション基金

〒163 東京都新宿区西新宿2-3-2電話 03(347)7094

第29回万国地質学会(IGC)は1992年日本で開催されることとなり、組織委員会事務局は地質調査所に設置されることになった。〒305 つくば市東1-1-3 地質調査所国際協力室気付け IGC対応係

XIII 訃報

今道 周一 名誉会員

今道周一名誉会員は平成元年8月5日午前10時2分肺炎のため逝去された。享年95才。

同氏は大正10年東京物理学校を卒業され、中央気象台で地磁気観測に従事、大正12年柿岡地磁気観測所長に就任し、関東大震災で被災した地磁気観測所の再建・整備を進められた。とりわけ、標準地磁気観測所として地磁気観測標準器の整備開発に心血を注ぎ、日本の地磁気観測の基盤作りに努められた。この間、アメリカ・カーネギー研究所の磁気儀、また国際センターQH Mと柿岡の標準磁気儀との国際比較観測を行い、観測精度の向上に努められました。特に昭和25年から27年間にわたり、国内各機関の協力を求め、標準磁気儀の開発に邁進され、当時の国際的超一流の磁気儀を完成するという大きな業績を残されました。

昭和27年退官されるまで、国内外の観測、地磁気観測所の開設など地磁気観測の発展に大きな貢献をされました。

昭和24年に地球磁場の複合に関する研究により京都大

学理学博士の学位を授与され、また数々の研究のうち太陽面爆発現象に伴う地磁気擾乱に関する研究(昭和15年)および日本における偏角の永年変化に関する研究(昭和31年)は大きな業績であります。また著書として、昭和14年に出版された地球電磁気学(岩波書店)その他があります。

昭和22年日本地球電磁気学会創設の際に評議員を務められ、昭和23年の第3回学会を柿岡に於て開催されました。また昭和36年の現体制に移る時の評議員も務められ、本学会の基礎作りに貢献されました。

退官後は昭和29年より東京理科大学に勤められ、同38年理学部長、退職のあと同49年まで学生の育成に努められた。昭和51年同大名誉教授を授与されました。

日本の地球電磁気観測の発展に対する功績により本年5月第85回学会総会に於て名誉会員の推挙されました。

同氏の数々の功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

<<会報へのご提案、ご意見、情報提供、寄稿、お待しています。>>

会長、総務、庶務までご連絡下さい。

会長 行武 毅 東京都文京区弥生 1-1-2 東京大学地震研究所
電話 03-812-2111(内)5735

816-3795(直) Fax 816-1159

総務 浜野洋三 東京都文京区弥生 2-11-16 東京大学理学部地球物理教室

電話 03-812-2111(内)4293 Fax 818-3247

庶務 林 幹治 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学理学部地球物理研施設
電話 03-815-8020(直) Fax 818-0745

地球電磁気・地球惑星圏学会

〒113 東京都文京区弥生 2-4-16

学会センタービル

(財)日本学会事務センター内

電話 (03)817-5801

Fax (03)817-5800

人間の科学特別委員会設置される

平成元年8月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月に開催した第107回総会において、人間の科学特別委員会を追加設置しましたが、今回の日本学術会議だよりでは、この特別委員会に加えて、最近発表された「委員会報告」等について、お知らせいたします。

人間の科学特別委員会の設置

本会議は、本年4月に開催した第107回総会において、それまでにすでに設置していた7特別委員会のほかに、「人間の科学特別委員会」の追加設置を決定した。

この人間の科学特別委員会は、同総会中に、委員会の構成（各部2人ずつ計14人）を済ませるとともに、第1回目の委員会を開催する等、直ちに、その活動を開始した。委員長には、中山和久第2部会員が就任した。

今回、本会議が、この特別委員会を設置した理由は次のとおりである。

〈人間の科学特別委員会の設置理由〉

ヨーロッパの産業革命に端を発した科学技術の進歩は急速にその度を加え、かつて人類が予想もしなかった程度に物質文明を開花させたが、一方、それによって人類は、過去に見られなかった重大な危機に立たされている。科学技術の進歩は一面において物質偏重の価値観を強め、生命に対する技術介入に係る不安や、地球生態系の激しい変化を招き、社会経済環境にも様々な問題を醸し出している。

人間が創り、人間が発展させてきた科学は、本来、真理を追求し、人間の幸福に貢献すべきものであるにもかかわらず、人間の生活や自然・社会環境に混乱を招いている側面もあるのではないかとこの矛盾も感ぜられ、ここに科学者の苦悩がある。我々は今や、科学の在り方を再考し、早急に人間と科学技術との不調和を克服する視点を明らかにしなければならない。

このためには、「人間とは何か」を問い直し、「人間存在の理法」ともいうべき概念を改めて考え、そこに立脚して、科学技術と自然との調和を求め、人類進歩への展望を模索するところから始めなければならない。

人間の人間たる特質はその精神であることを思えば、人間を知性、感性の面から広く捉え、人間そのものについてのもっと深い知識と理解が強く望まれる。この立場から、人間を個体としてばかりでなく、生物学的並びに社会的集団として把握し、人間の総合理解に努める必要がある。

この特別委員会は、このように人間を学際的、総合的に把握し、人類の危機に対処することを目指すものである。

「委員会報告」2件を発表

このたび、本会議の「生命科学与生命工学特別委員会」と「化学研究連絡委員会」は、それぞれ、当面の重要問題に関する審議結果を取りまとめ、本会議運営審議会の承認を得て、「委員会報告」として発表した。各「報告」の要旨は次のとおりである。

ヒト・ゲノム・プロジェクトの推進
について—生命科学与生命工学特別
委員会報告—〔要旨〕

ヒト・ゲノムの全DNA配列決定を主たる目標とするヒト・ゲノム・プロジェクトは、極めて大きなインパクトを学術研究に与えると期待され、我が国として早急かつ重点的に推進すべきである。そのためには推進組織を設け、基本計画の立案、実施計画の策定、省庁間などの協議、国際協力、データ・ベースとレポジトリ整備などを総合的に行うべきである。一方この推進組織と並んでこれと密接に連携し、研究計画の実施に伴う社会的・法律的・倫理的諸問題を客観的・公正に判断することを目的とするチェック機構を設立し、調和のとれた施策を進める必要がある。

大学等における化学の研究環境の整備
について—化学研究連絡委員会報
告—〔要旨〕

化学研究連絡委員会は、昭和63年に発表された日本化学会報告書を参考資料として、大学等における化学分野の研究環境の現状について検討を行った。その結果、「全国的視野に立つ化学の新しい研究体制」の実現に向けての努力を傾注するとともに、現行の研究環境を抜本的に改善するために、関係方面に強く訴えるべきであるとの結論に達した。日本化学会報告書に盛られている数項目の重点施策のうちでも、特に、①先端研究設備の購入・維持予算の大幅増額、②研究基盤整備のための大学院関連予算の充実、③化学の特殊性を配慮した研究室面積の拡充、は緊急に実施すべきものと考えられる。

平成2年度共同主催国際会議

本会議は、昭和28年以降おおよそ4件の学術関係国際会議を関係学術研究団体と共同主催してきたが、平成2年度には、2件増えて、次の6国際会議を開催することが、6月20日の閣議で了解された。(カッコ内は、各国際会議の開催期間と開催地)。

◆第14回国際土壌科学会議

(平成2年8月12日～18日、京都市)

共催団体：(社)日本土壌肥料学会

◆第22回国際応用心理学会議

(平成2年7月22日～27日、京都市)

共催団体：日本心理学会

◆第15回国際微生物学会議

(平成2年9月13日～22日、大阪市)

共催団体：日本微生物学協会

◆第11回国際数学連合総会及び第21回国際数学会議

(平成2年8月18日～29日、神戸市他)

共催団体：(社)日本数学会他6学会

◆第11回国際神経病理学会議

(平成2年9月2日～8日、京都市)

共催団体：日本神経病理学会

◆第5回国際生態学会議

(平成2年8月23日～30日、横浜市)

共催団体：日本生態学会

国際社会科学団体連盟(IFSSO)第9回大会・総会の日本開催

国際社会科学団体連盟(IFSSO)の第9回大会及び総会が、本年10月2日(月)～7日(土)、東京六本木の国際文化会館と日本学術会議で開催される。

国際社会科学団体連盟(International Federation of Social Science Organizations, 略称IFSSO)は、世界の社会科学の発展に貢献することを目的とする、世界各国の大学院や学術会議で構成されている、社会科学分野を代表する国際学術団体である。現在、35か国の国家会員等で構成されており、我が国では、日本学術会議が、我が国を代表して加入している。また、現在、日本からは本会議の藤井隆第3部会員がIFSSOの事務総長を務めている。

なお、IFSSOは、社会科学分野の国際学術団体の連合体(総括機関)である国際社会科学協議会(International Social Science Council, 略称ISSC)に加入しており、ISSCの中では、国及び地域を代表する機関という位置付けもっている。

今回の会議には、IFSSOに加入している各国の大学院や学術会議の代表、並びに関係する国際機関、国際学術団体の代表など、50を超える国々から約300名(うち、外国人は約150名)の科学者等が参加する。

この会議では、メインテーマ「変容する世界の学術政策」の下に、「研究・訓練体制の改革」、「既存領域を超える新分野」、「社会と科学・技術のインターフェイス」及び「国際協力のアカデミック・インフラストラクチャー」の4つのサブテーマが設けられ、多方面から世界の学術政策の変化が論じられる。

また、この会議では、特に、3つの日本セッションが設けられ、「急激な科学技術の進歩」について、①人間に与えるインパクト、②法律と政治に与えるインパクト、③社会経済システムに与えるインパクト、という3つの視点から

論じられ、日本の先端研究が広く紹介されることになっている。

■本件問い合わせ先：〒102 東京都千代田区紀尾井町7-1、上智大学心理学研究室内、国際社会科学団体連盟第9回大会日本組織委員会事務局、電話 03-238-3811

日本学術会議主催公開講演会開催のお知らせ

本会議では、毎年、学術の成果を広く国民に還元するという日本学術会議法の主旨に沿うための活動の一環として、公開講演会を開催しています。

このたび、下記の2つの公開講演会を開催することにしました。多数の方々のご来場をお願いします。

I 公開講演会「人間は地球とともに生きられるか」

●日時：平成元年10月27日(金)13時30分～17時

●演題と講演者(カッコ内は所属部)

①「地球の温暖化とその影響」：吉野正敏(第4部)

②「地球環境と農業のかかわり」：久馬一剛(第6部)

③「地球環境の経営と人間社会の発展」：藤井 隆

(第3部)

II 公開講演会「“人権の歩み”から何を学ぶか—フランス人権宣言100年を記念して—」

●日時：平成元年11月18日(土)13時30分～17時

●演題と講演者(カッコ内は所属部)

①「“人権”以前の世界」：弓削 達(第1部)

②「近代日本の人権思想—自由民権運動の人権論を中心に—」：大石嘉一郎(第3部)

③「科学技術と人権」：杉本大一郎(第4部)

④「人権の進化と創造」：南 博方(第2部)

●会場：日本学術会議講堂(両講演会とも)

(東京都港区六本木7-22-34)

(地下鉄千代田線、乃木坂駅下車1分)

◆申込方法：往復はがき(住所、氏名、郵便番号を明記)

◆申込締切：各開催日の1週間前まで(先着順、無料)

◆申込先：〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議事務局庶務課講演会係

■なお、本会議では、本年度には、上記の他に、「日本の学術動向」に関する公開講演会の開催を計画しています。開催日、会場、講演者などの詳細については、決定次第、新聞広告等でお知らせする予定です。

日学双書の刊行案内

本会議の第102回総会と第103回総会で行われた、本会議会員による各自由討議の記録を中心に編集された次の日学双書がそれぞれ刊行されました。

・日学双書 No.4 「21世紀へ向けてのエネルギー問題」

・日学双書 No.5 「食糧生産と環境」

[定価] No.4：1,500円、No.5：1,000円

(両書とも、消費税込み、送料260円)

※問い合わせ先：(財)日本学術協力財団(〒106 東京都港区西麻布3-24-20、交通安全教育センター内)

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291